

長屋と人々の暮らし①

江戸の町の発展と庶民の生活

江東区深川江戸資料館

現在の団地やアパートなどの集合住宅の原型ともいわれている江戸時代の長屋。江戸時代において長屋は、庶民の住宅であり、「熊さん、八つつあん」で知られる住人が登場する落語や「髪結新三」などの歌舞伎、浮世絵などでも題材として取り上げられています。天保年間（1830～1844）の深川佐賀町の町並を想定再現している深川江戸資料館の常設展示室でも、長屋は大きな位置を占めており、家族構成や職業の異なる5世帯の様子を展示しています。

資料館ノートでは本号から6回にわたり、「長屋」について紹介します。今回は、長屋についての概要と、江戸の町との関わりについてみていきます。

1. 江戸の町の整備

(1) 徳川家康入府

江戸の町の発展は天正18年（1590）、徳川家康が江戸に入府し、慶長8年（1603）に征夷大将軍に命ぜられ、江戸に幕府を開き町の整備を行ったことに始まります。江戸城を中心に、内濠、外濠、神田川などが螺旋状に城を取り囲み、家臣などの武家屋敷を軸として町は放射状に広がり、日本橋から新橋に至る市街地は、最初に造営された部分でした。その頃の深川地域の周辺は、江戸の町の中でもまだほとんど海水の干満する湿地であったといえます。

そのような土地を家康は、先ず堀を掘って溜水を通し、その土で埋立地をつくるという土木工事に着手しました。埋め立てられてできた土地には、「尾張町」など、その工事を担った大名の国の名や、「鍛冶町」のように職業種別の名がつけられました。そして、町の区画は60間四方を一町にし、中央の道幅は6丈としました。このように江戸は、江戸城を中心とした武家の都といえる一方、絶えず多くの商工業者が移住し、家康の旧領（三河や遠江、伊勢など）からも多くの商人が移ってきた町でした。

(2) 明暦の大火と本所・深川地域の開発

家康の代から作り上げた江戸の町の景観が一変し



【図1】長屋の様子（深川江戸資料館常設展示室内）

たのが明暦3年（1657）の江戸大火でした。明暦の大火は江戸市中の6割を焼失させ、町造りに大きな変更をもたらします。それまで町の中心地に立地していた大名屋敷や寺社を郊外や新開地へ移転させ、延焼防止のために、市中に広小路・火除地などを設け、道幅を拡充し、両国橋の架橋を行いました。この両国橋架橋により、隅田川以東の本所（墨田区）・深川（江東区）地域の開発がこの頃から進むこととなります。

当地域では、万治3年（1660）、幕府は本所奉行を設置し、竪川・横川を開き、大名や旗本の屋敷割を行い、町屋の区画整備を行いました。この本所・深川地域の開発は、江戸周辺部の都市化を急速に進める要因となり、大火を経て、江戸の町は従来の江戸城から2里（約7.8km）四方から4里四方へと大幅に拡大することとなりました。

(3) 江戸の町の成長

こうした整備の結果、江戸の町は地方から武家や商人、職人などの流入により成長し人口も増加、享保期（1716～1736）までに人口が百万人を数える巨大都市へと発展します。江戸の町の構造は、面積からすると、およそ武家地が6割、寺社地が2割、町地が2割であったといえます。人口の約半分が町人であったことから、この2割のなかに町人地が集中していたということになります。すなわち、町人の住まいが非常に密集していて、1軒1軒が小さかったと

ということになります。その代表的な住まいのかたちが今回取り上げる「長屋」です。

2. 長屋とは

(1) 歴史

長屋とは、主に江戸時代における庶民の代表的な住宅のことを指します。その歴史は、古代から寺院や官庁のなかにあり、僧や尼、下級官僚の住まいとして用いられていました。その建物の内部を幾つかの住戸に仕切り、それぞれ専用の出入口をもったもので、中世、近世の武家屋敷や町屋でもこの形式のものが建てられていました。

(2) 江戸時代の長屋

その概要について、当時の住宅の様子を具体的に示す史料は少なく、^{こけんず}沽券図（長屋の割付などを記した平面図、土地売買用台帳のようなもの）や「^{もりさだ}守貞謄稿」（江戸時代の三都の風俗を記したもの）などから窺い知ることが出来ます。

長屋は、表の大通りに面して建てられた住宅を一般的に表長屋（表店）といい、2階建てが多く、1階部分が商いのスペース、2階部分が住居になっています。それに対して、表通りから表店の裏側へ入っていく3尺～6尺の小道に面している住居が裏長屋（^{うらだな}裏店）で、落語に出てくる「熊さん、八つつあん」は、この裏長屋の住人です。

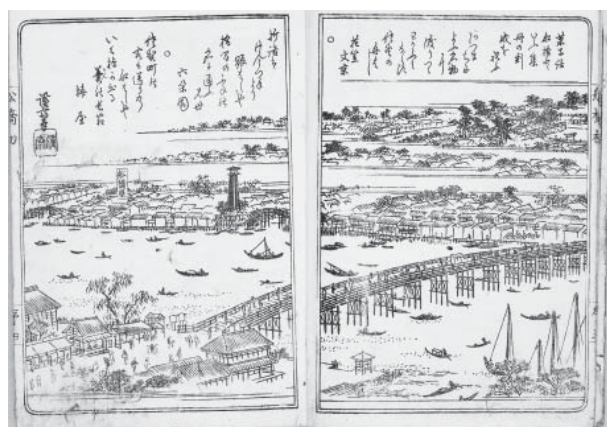
裏長屋は、主に、9尺2間（間口9尺、奥行2間）の大きさといわれています。その様子は、当館の常設展示室でも再現されています。【図1】は裏長屋から表店が並ぶ表通りの周辺の様子です。路地をはさんで割長屋が続き、表通りとの出入口には裏木戸（長屋木戸）があります。また、江戸の町では武家屋敷内に家臣たちが住む長屋もありました。

こうした裏長屋には、大工や左官、^{やねふき}屋根葺や^{かみゆ}髪結いなどの職人や、野菜やむきみなどを売り歩く振売業者（^{ぼてふ}棒手振り）など、様々な職業の人びとが生活していました。

また、裏長屋にも腕利きの大工や左官の親方クラスが住んでいた2階屋や、展示室で再現されているような「割長屋」の他にも、割長屋をさらに棟で割り、三方を壁に囲まれている「^{むおわりながや}棟割長屋」などがあります。

(3) 深川地域と庶民の生活

深川地域の開発は、天正18年に家康が小名木川を開削し、沿岸に海辺大工町ができたことに始まり



【図2】船橋屋織江「菓子話船橋」
天保12年(1841)刊(江東区教育委員会蔵)

ます。慶長元年(1596)には深川八郎右衛門等が、小名木川以北(現森下・常盤周辺)を開拓。その後、寛永6年(1629)に隅田川沿岸に深川獵師町(現佐賀・永代・清澄付近)が成立し、同18年(1641)におきた寛永の江戸大火により日本橋・神田の材木置場を深川に移転させます。その後、明暦の大火をきっかけに新開地として開拓され、都市化され、「庶民の街」としても成長していきました。これらの背景により、当地には職人を始めとする町人が多く住んでいたといわれています。

当館の常設展示室で再現している地域、深川佐賀町にも長屋はあったと想定され、その頃の町の様子が「菓子話船橋」(【図2】)に描かれています。これは、深川佐賀町の名店、菓子の船橋屋の店主による菓子作りの手引書です。その挿絵には、対岸から見た佐賀町周辺が描かれ、他にも隅田川沿岸の蔵や、通りをはさんで並ぶ店舗、また船着場や船宿のような店もあります。そして、この表通りの店舗の裏手に長屋があったと思われます。

このように、家康の入府を機に成長していった江戸の町は、武家や町人などが多く住み八百八町と例えられるような巨大都市へと変容を遂げました。そのなかで、長屋は江戸の町を支える人びとが多く暮らし、落語や歌舞伎などでも取り上げられるような生活の場であったのです。

(主な参考文献)

平井聖『図説 日本住宅の歴史』(学芸出版社/1980)

『季刊大林』13号 長屋(大林組/1982)

大石学『首都江戸の誕生 一大江戸はいかにして造られたのか』(角川書店/2002)